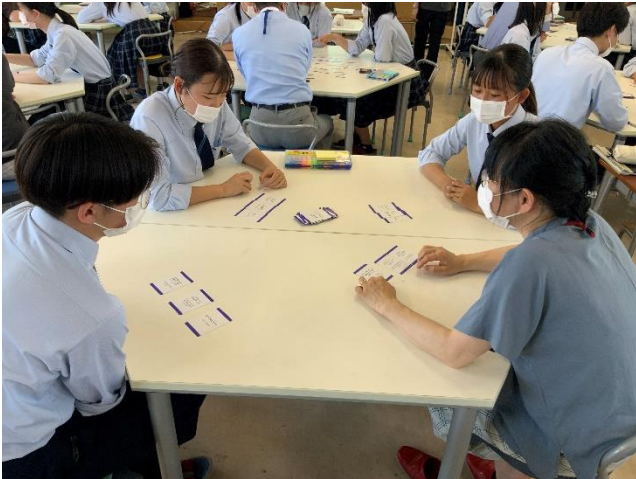


# 「看護医療基礎」 6月30日もしバナゲーム 尼崎市役所包括支援担当 田中良亮さん、小寺達也さん

●今回は、市役所の方から尼崎市の医療・介護連携の取り組みの説明を受けました。私は在宅療養班で高齢者の孤立問題を調べているので、尼崎市の現状や取り組みを詳しく知れてよかったです。高校2年生で末期がんという設定で残りの人生をどうしたいかを話し合う「もしバナゲーム」を体験しました。「もしバナゲーム」を通じて、願いや価値観を理解しました。ゲームを進めていくことで自分は人生最期の時こんなふうに過ごしたいのだと気づけました。周りにたくさんの感謝を伝えること、機械につながれたくないこと、自分の身体の進行を知りたいことなど、今までは一度も考えたことがないことを知るととても良い機会でした。私は、家族にあまり迷惑をかけたくないという考えがあります。しかし、グループワークで「家族だからこそ迷惑をかけあって、助け合いたい」という意見を聞いた時、こんな意見もあるのかとこれだけに限らず何度もそのような気持ちになりました。グループで、新しいカードを足すならどのようなものにするかを考えた時、高齢者に関わるカードが多く出てきました。もし、このゲームをしている年代が自分の親の世代や高齢者だとどんなカードを足すのか気になりました。どこかで「もしバナゲーム」をする機会があればどんなカードを足したいですかと尋ねたいと思いました。



した。人生最期のことをまだ16歳なのに考えるのだと初めは思っていました。しかし、自分を知る機会にもなったし、様々な意見を聞くことができ体験できてよかったです。

●今回は尼崎市の市役所の方に来ていただき、医療・介護連携の取り組みについて学び、また、「もしバナゲーム」をしました。以前にも、先輩や地域の方と「もしバナゲーム」をしたことがありました。同級生とこのゲームをするのは初めてで、「もしバナゲーム」を何回かやったことがありますが、一緒にやる人が変わると意見が全然違うと気付きました。「もしバナゲーム」をして、人それぞれ考え方や価値観は違うので、どんな意見でも他の人を尊重することが大切だと気づくことができました。自分の意見も固定的ではなく、他の人の意見を聞くと考え方が変わったり、人生の最期を迎えるときのイメージが変わったりしました。今回は高校2年生で末期がんという設定でした。

テーマを設けてゲームをするのは初めてで、さらにそのテーマが今の自分に起きてもおかしくない設定だったので、もし現実で今自分が末期がんになってしまったらどうなるのかと考えさせられました。好きなものが食べられる、色んな人に感謝を伝える、機器につながれていないなど人それぞれ優先したいことの順位が違って考え方も全然違っていたので、新しい考え方も学ぶことができました。自分と異なる意見を持った人に対して、否定せず、肯定することも大事だと思いました。前回学んだACPにしても、人生の最期をどう生きたいかなどその人を尊重する形で話を聞きたいと思いました。長く生きてほしいけれど、もし延命治療をしないと云われたら否定せずにその人を受けたいと思います。グループワークで新しいカードを作るならどのようなカードを作りたいかを話し合いました。旅行に行きたい、緩和ケアをしたい、家族や親戚や身近な人に囲まれて看取られたい、寝ている間に静かに亡くなりたいなど様々な意見が出ました。自分が考えないような意見が出たので、他の年代の人はどのようなカードを作りたいか気になりました。「もしバナゲーム」をすることで自分が人生の最期をどう迎えたいか曖昧に考えていたことが具体的に考えることができました。こんな悲しいことをゲームにするんだと最初は思っていたけれども、このようなゲームがないと逆に話し合ったり考える機会も減ってしまうので良いゲームだなと思いました。色んな意見を知るためにも、「もしバナゲーム」やACPなど家族としていきたいと感じました。



